

## 濟州島、4・3 遺骨奉安館、江汀マウル、そして、北村里記念館

—多民族共生人権教育センターフィールドワークから—

飛田雄一

昨年11月30日～12月2日、濟州島にでかけた。NPO法人 多民族共生人権教育センター（メールック）主催の濟州島フィールドワークのガイドだ。テーマは、「濟州4・3」、旧日本軍施設、そして江汀マウルだ。

一行は、18名。2泊3日の旅は充分な時間ではないが、最近KALの帰国便が遅くなつたので、まあ日程の割には時間がとれるとも言える。往路は10:50 濟州着、帰路は19:30 濟州発だ。すでに本通信で濟州島のことを書いているが、今回は4・3関係の新しい記念館の紹介などを中心に報告したいと思う。

初日、三性穴、牧官衛訪問ののち、濟州4・3記念館（2008.3開館）を訪問した。視界50メートルという感じの天気だった。4・3記念公園は中央にモニュメントがあり、左に記念館、上部に慰靈館がある。その右に朝鮮戦争の時期に予備検束で捉えられ殺害された方々の多くの慰靈碑が並んでいる。そしてその隣に新たに「濟州4・3犠牲者発掘遺骨奉安館」が作られていた。

2006年から2010年まで48億ウォンの予算で、11ヶ所の集団虐殺現場で遺体発掘が行われた。濟州空港の滑走路付近では384名の遺体が発掘されて、大きなニュースとなった。このうち15名の遺体はDNA検査により身元が確認され、60余年ぶりに遺族との対面がなされた。いま奉安館には納394体の遺骨が納められている。



「濟州4・3平和祈念館」



これは「大田地域行方不明犠牲者慰靈碑」



4・3犠牲者発掘遺骨奉安館に納められている遺骨



「濟州4・3犠牲者発掘遺骨奉安館」右・展示室、左・奉安室

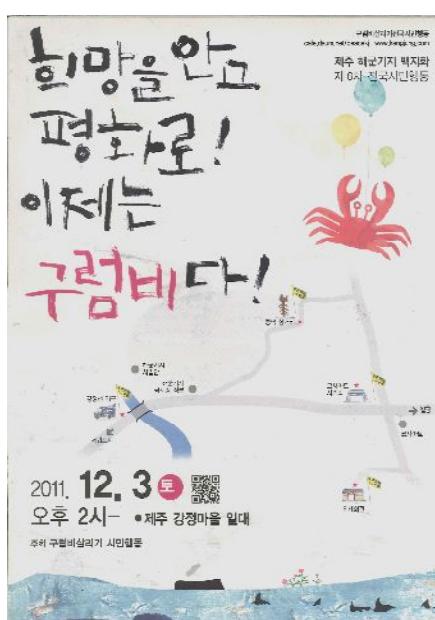
2日目、バスを走らせてまずは西帰浦の正房瀑布へ。ステキな滝がいくつかあるが一つだけ見るならやはり正房瀑布だろう。そして江汀マウルに向かった。韓国海軍基地建設が進められているが、多くの住民が反対している。反対運動のなかで多くの逮捕者もでており、警察官が要所要所にいるなかでの訪問だった。



「江汀青少年マウル会館『文化の家』」

反対グループの拠点になっている会館でコ・ゴニル委員長と支援活動をしているドキュメンタリー監督ヤン・ウンモさんのお話をうかがった。

というより大きな池だ。



2011. 12. 3 集会のポスター



コ委員長はマンガ家でもある。



コ委員長



工事が一部始まっている

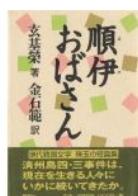
我々の訪問後すぐの12月3日には沖縄からの参加者も迎えて集会が開かれている。沖縄と済州島は類似点が多いが、基地が特に集中している点もそのひとつだ。前回、訪問したときはまだ建設が始まっておらずに、海岸の反対小屋も訪問できたが今回そこにはもう立ち入ることができなかつた。済州島はいま「オルレ」とよばれるハイキングコースが整備され、訪問の度にその距離が伸びている。江汀マウルも景色のいいところでそのコースの一部で、反対小屋の前もハイカーがいた。しかし今はそのコースも変更されてしまった。

江汀マウルは水の豊富なところだと聞いていた。今回、委員長がその源の泉に案内してくれた。そこは泉

江汀マウル訪問のあとは、すでに本通信でも紹介した日本軍飛行場跡、平和博物館を訪ねて済州市のホテルにもどった。



ノブンスンイ 4.3 記念館  
済州市朝天邑北村里 1599 番地



3日目朝、北村里事件記念館を訪問した。ここでは、4・3事件時、虐殺事件があった所として知られている。2000年5月、ようやく4・3特別法が作られるという時に、関係者の証言をうかがったが、当時は石が並べられているだけのところであった。玄基栄の『順伊おばさん』がとりあげた場所でもある。当初、玄基栄記念館的なものを作ろうとしたようだが、本人それを望まず、今のような記念館になったようだ。

玄基栄は1978年、『創作と批評』に「順伊おばさん」を発表し、4・3が再び取り上げられるきっかけを作った作家だが、そのことで情報機関に連行されている。



順伊おばさんの碑

案内板には、「ここノンブンスンイは済州4・3事件当時、武装隊の奇襲による軍人二人の死が引きがねとなり、(1948年)12月19日に討伐隊が大虐殺を行った悲劇の現場である。ここにはその日犠牲となった乳飲み子の墓もいくつか残されている」とある。

北村里には虐殺事件により、跡継ぎの途絶えた家が少なくなく、一時は「無男村」と呼ばれたこともあるという。



北村里慰靈碑



同犠牲者刻銘碑

慰靈碑と刻銘碑について、記念館のパンフレットには次のようにその趣旨が書かれている。

「私たちは、平和の名のもとにこの石を建てる。世界の人々があの惨事の生々しい真相を通じて、本当の平和とは何かを学べるように、戦争反対の名のもとにこの石を建てる」

何回目かの訪問になる済州島であった。ますます観光地として発展しているが、一方で歴史の真実を記録する活動も年々進んでいることを感じさせる訪問であった。